

<p><b>7月19日</b> <b>(日)</b></p> <p>ヨブ記 23章</p>	<p>「どうしたら、その方を見いだせるのか。おられるところに行けるのか。その方にわたしの訴えを差し出し、思う存分わたしの言い分を述べたいのに」(3-4節)。苦しみの人ヨブの切実な願いは、神に直接出会い、疑問のすべてを思う存分ぶつけること。このヨブの叫びを真正面から受け止め、救ってくださる方、十字架の主、今朝も命の言葉を求めて集おう。</p>
<p><b>20日</b> <b>(月)</b></p> <p>ヨブ記 24章</p>	<p>「父のない子は母の胸から引き離され、貧しい人の乳飲み子は人質に取られる。…神はその惨状に心を留めてくださらない」(9節、12節)。この世界で日々現実起こっている不条理な「惨状」を神に訴えるヨブ。神に向かうヨブの「渾身の叫び」に心が痛くなる。主イエスはインマヌエルの福音を携え、この「渾身の叫び」に応える方として来てくださった。感謝！</p>
<p><b>21日</b> <b>(火)</b></p> <p>ヨブ記 25章</p>	<p>「恐るべき支配の力を神は御もとにそなえ、天の最も高いところに平和を打ち立てられる」(2節)。友人ビルダドたちは、世界の不条理な「惨状」から遠く離れ、平和を打ち立てる神を語る。「それゆえ人間には神の御旨を理解しきれないのだ」と。その遠く離れた天と地をつなぐ方として主イエスは私たちの間に来てくださった。神のもとにある平和と希望を携えて。</p>
<p><b>22日</b> <b>(水)</b></p> <p>ヨブ記 26章</p>	<p>「だが、これらは神の道のほんの一端。神についてわたしたちの聞きえることはなんと僅かなことか」(14節)。ヨブもまた、神を理解しきれない人間の小ささを語るが、友人たちのように「信仰の優等生」らしく振舞うことをしない。「分からない、おかしい、納得できない！」と神に食らいつき、あきらめない。神に向かうヨブのこの激しさは私たちに何を示しているだろうか。</p>

<p><b>23日</b> <b>(木)</b></p> <p>ヨブ記 27章</p>	<p>「わたしは自らの正しさに固執して譲らない。一日たりとも心に恥じるところはない」(6節)。旧約の人ヨブが固執したのは「律法違反の罪を一切犯してない自分の正しさ」だった。けれども主イエスが教えてくださった罪は「隣人を自分のように愛せない私たちの貧しさ」。そして、その私たちの貧しい愛を覆い救う、神の愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」(エフェソ 3・18)。</p>
<p><b>24日</b> <b>(金)</b></p> <p>ヨブ記 28章</p>	<p>「では、知恵はどこから来るのか。分別はどこにあるのか」(20節)、「その道を知っているのは神。神こそ、その場所を知っておられる」(23節)。私たちは人を生かす知恵と分別をどこに見出すことができるのだろう。ヨブは不条理な苦難を通して、最終的に神の知恵に近づけられていく。小さな私たちに先立って、神がまず私たちを愛してくださっているから。</p>
<p><b>25日</b> <b>(土)</b></p> <p>ヨブ記 29章</p>	<p>「どうか、過ぎた年月を返してくれ。神に守られていたあの日々を。あのころ、神はわたしの頭上に灯を輝かせ、その光に導かれて、わたしは暗黒の中を歩いた」(2-3節)。過去の輝く日々を思い起こしながら嘆くヨブはグルグルと同じ場所を回り続ける。このヨブの嘆きも神に覚えられ、聴かれていることを想う。今日「暗黒の中」を歩んでいる一人ひとりと共に。</p>
<p><b>26日</b> <b>(日)</b></p> <p>ヨブ記 30章</p>	<p>「神よ／わたしはあなたに向かって叫んでいるのに／あなたはお答えにならない。御前に立っているのに／あなたは御覧にならない」(20節)。泥の中に投げ込まれ、塵芥に等しい者に神は価値を見出さないのだろうか。主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れて(創世記2:7)くださった。主なる神の命の息と共に生きる「わたし」とされて。</p>